【問題1】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「これは真実だと主張するのが、いまや、あらゆる架空の物語の慣例である。しかしながら、わたしの話は、本当に本当なのである。」(ボルヘス『砂の本』)

ボルヘスはこう言つて、無限のページをもつありえない本の話語り出す。彼一流のとはけた書き出しだが、そこに、ある皮肉な真理を読み取ることも不可能ではない。つまり、架空の話をするときこそ、人はそれがいかに本当であるかを強調するのが常なのである。

これは意外にも、われわれ自身がよく知っている日常の真理かもしれない。「確実に金儲けができます!」「絶対確実に幸せになります!」こうしたキャッチフレーズほど、疑わしさを醸し出すものはあるまい。ここで「確実」という言葉は、むしろ「胡散臭さ」の決定的な印となっている。つまり、「確実」という言葉のこうした使い方は、それを使う人が意図しているのとはまったく逆の効果を及ぼしている。

A これはとても興味深いことである。「確実」という言葉をわれわれが使う用法を調べてみると、そのほとんどが、「(完全には) 確実でないこと」について用いられているのではないかと思われるほどである。

何かが本当に疑いようがないと思っており、それが周知のことだと確信しているとき、わざわざその確実さを強調するだろうか。たとえば、快晴の日に空が青く見え、他人にもそのように見えていることが、どんなに確かだと思われても、ふつうわれわれは、青空を指さしながら、「空は確かに青いのだ、これはまったく確かなことだ!」などと叫ぶことはしない。もししたとしても、何か新手的パフォーマンスだろうと思われるだけで、「確かさ」の真剣な主張であるとは思われまいだろう。

「確かさ」を懸命になって主張するとき、われわれは自分の確信することが他人に共有されていないことを知っており、だからこそ「確かさ」を主張する意味を見出している。他人もまた自明に認めているにちがいないことを、わざわざ「確か」であると強調する必要はない。「雨が降っている」と言われたら、「ああそうか」と思うだけであろうが、「絶対に雨が降っている、このことだけは絶対に確かだ」とまで言われたら、思わず確かめなくなるだろう。

とすると、こんなことが言えないだろうか。他人も同じことを確信しているという自信がないときこそ、人は「確かさ」を強調するのではないだろうか。「確かさ」を声高に主張するときこそ、われわれの心は不安に満ちており、その不安を掻き消そうとするかのように、われわれはますます声を張り上げるのではないか。

逆に、何の疑いもなく「確かだ」と思っていることは、それが「確かだ」ということすら通常は意識されていないのではないか。だからわれわれは、本当に確かなことは、わざわざ確かだと強調したりはしない。確かであるかどうか不安が生じたとき、はじめて「確かさ」を意識的に追求する動きが生じるのである。

こうして一つの考えが浮かび上がってくる。本当に何の疑いもなく「確か」だと思われることは、かえってことさらに「確か」だと言われることはなく、あまりにも確かなことは、語られることさえなく、沈黙のうちに沈んでいるのではないか、というのがその考えである。そのように沈黙のうちに沈んでいる広大な世界を探究しようとするのが、「現象学」と呼ばれる学問である。

「確かだ」とことさらに意識されていないような「確かさ」の様子を、(ここでは「自明性」と呼ぶ。「自明性」とは、ドイツ語の Selbstverständlichkeit に対応する語であり、現象学用語としても用いられる。このドイツ語は、「おのずから、それ自体だけで」(selbst-)「理解される」(verständlich) という意味である。自然に理解されていること、ことさらに意識することはないが、それでも「おのずから」わかっていることが、「自明」と呼ばれる事柄である。

このような「自明」なもの、あまりにも「あたりまえ」であるがゆえに、ふだんわれわれが問おうともしないものこそ、エドムント・フッサール (Edmund Husserl 一八五九—一九三八) によって創始された「現象学」と呼ばれる学問があえて問おうとするものである。それゆえフッサールは、現象学を「自明なもの」の学と呼ぶ。ある入門講義のなかで、彼はみずからの考える哲学を次のように特徴づけている。

「『哲学は』もっぱら自明なことを問題にするという奇妙な性格をもっている。そして実際、次のように言っても決して言いすぎではないのである。すなわち、自然的な人間にとって(また自然的な態度にとどまる学者にとっても) 自明であるような一切のことが、最も深い謎に纏い付かれていることが反省のなかで明らかになる。そして、哲学をはかならぬ自明なもの、学と呼ぶとき、それは逆説的ではあるが、真なのである。」(XXXXV, § 「哲学区入門」講義、一九三二/三三年)

つまり現象学は、「あたりまえのこと」をあたりまえに前提した上で、「あたりまえでないこと」、驚くような新奇な知見を求めるのではない。この点で現象学は、科学と異なる性格をもつ(ただし、現象学は決して反科学的ではない)。

D 科学的知見は、何らかの程度において、これまで知られていなかった新しい内容を含んでいる。リンゴが木から落ちるのは「あたりまえ」である。そんなことは誰でも知っている。だが、この「あたりまえ」の事実を「重力」という力によって説明するということは、決して自明ではない。生物が成長するのは「あたりまえ」だが、それがイ伝子によってセイ御されていることは、「あたりまえ」ではない。科学は、自明なことには手をつけず、それを事実として前提した上で、そこに潜んでいる驚くべき新たな事柄を明るみに出す。

これに対し現象学は、むしろ「あたりまえ」ゆえに通常は素通りされてしまっているもの、それゆえ何かをテーマとして追究するような思考にとっては、ほとんど意識に上らないような次元を問題にする。だが、このことによって、われわれの経験や生は、言葉を失うほどの「謎」として立ち現われてくる。リンゴが木から落ちるのは「あたりまえ」である。なぜ「あたりまえ」と思えるのか。何についても「なぜ?」と尋ねる子供が、「なぜあたりまえなの?」

と尋ねたら、どう答えるか。こう言ってみる。「それは重さがあるからだろう」。子供に石を持たせる。「これは重さがあるだろう？ 手を離してごらん。重いものは下に落ちるだろうか？」そこで子供は、さらにだめ押しの問いを発する。「重いってどういうこと？」(ここまで来ると、少なからぬ大人が困惑したり苛立ったりしはじめる。石を持たせながら、「ほら、これが重いついていうことだよ。わかるだろう？ 簡単なことだよ」と言う。だが、この教え方は、「石って何？」という問いにも適用できる。石を手持たせて、「ほら、これが石というものだよ。わかるだろうか？」と言うのである。同じ教え方で、違うものを教えられる子供は、結局自分で答えを見つけ出すしかない。

これと同じ方式で、あれこれの問いを突きつけられたら、どうであろうか。「見る」とはどういうことか、「もの」を見ることと、「絵」を見ることはどのように違うか、「外の世界を経験する」ことと、「心のなかで空想する」ことはどのように異なるか、「過去」と「現在」はどう違うか、「経験する」とはどういうことか、「心」とは何か、「私の身体」は「物体」とどう異なるか、「私」とは何を意味するか、「他人」と「私」はどのように同じで、どのように異なるのか、「他人の心」についてどうやって知ることができるのか、等々。

あまりにも「あたりまえ」のことについて問われると、われわれは苛立ったり、途方に暮れたりする。そのような次元は、いつもすでに経験され、生きられていて、気づけばいつもそこにあるのだが、あらためて語ろうとすると、言いよどみ言葉を失ってしまう。よく馴染んでいて、自分自身の生と一つになっているがゆえに、それについて語ることはかえって難しい。それについて語る言葉がない。「あたりまえのこと」は、通常、語らなくてもわかっているからである。

だが、この「語らなくてもわかっている」ということは、現実を言葉で切り取って整理しようとする思考にとっては、曲者である。わかっているがゆえに、簡単に語れそうに思える。そして、実際に語ってしまう。それで十分であるかのように思ってしまう。わかっている人間同士の間では、それで通じたかのようにも思われる。だが、そこで語られようとしていたものが決定的に変質してしまっていることに、われわれはしばしば気づかないのである。たとえば、「重さ」を「重力」によって説明しても、「重いついてどういうこと？」という子供の問いに答えたことにはならないだろう。重力にもついで言うなら、羽も石も等しく「重さをもつ」。しかし、重力による説明は、「羽の軽さ」に対する「石の重さ」を説明してくれるわけではない。そして、このような「重さ」こそ、日常的生にとってはより基本的で「あたりまえ」の次元に属する。

ところで、「重いついてどういうことか」についての子供の問いに、「重力」による科学的説明で答える、といったたぐはぐさは、実は現代のわれわれにとつて、それほど笑えないことなのではないか。科学によって、専門知によって、日常の生への問いに答える、ということとは、現代ではさほど不思議なこととは思われない。「確かさ」を求めようとするなら、専門家に説明してもらった方が、「安心する」のである。このことにはもちろん、元々は正当な理由がある。だが、そこでわれわれが手に入れている「確かさ」は、どのような種類のものか？ 「安心」と結びついているなら、それは純粋に科学的な「正確さ」のようなものではないであろう。そもそも「科学的な正確さ」がなぜわれわれを安心させる「確かさ」として働くことができるのか、ということはま

たしても科学的な正確さによって答えることができない問いである。

そのような問いは、現代人の生のなかで、どこどこに覆いようもなく噴出する。だがわれわれは、しばしばそのような問いをまさしく「問い」として立てる術をもたないし、もし問いを立てることができたとしても、その問いの前で呆然と佇むことしかできない。「自分」とは何かがわからなくなったとき、「他人」とは何かがわからなくなったとき、「世界」とは何かがわからなくなったとき、「生」がなぜ営まれているのか、「死」が何を意味するのか、わからなくなったとき、これらの問いに対して、手取り早く答えてくれるものを見つけられる人は稀であろう。多くの場合は、問いに蓋をすることしかできない。

問いに蓋するのは、怖いからである。不安だからである。それでは、その不安に、aに立ち向かうことが求められるのだろうか？

現象学は、一見こういった問いとは無縁であるように見える。実際、フッサールは、こういった(かつて「実存的」とも呼ばれた)問いにb 正面から答えようとはしない。

それにもかかわらず、フッサールの創始した現象学は、先に述べた一連の問いにも、どこかで通じているように思われる。噴出しようとする問いに蓋をして無視するのではなく、不安と派手に一戦交えるのでもなく――不安に呑み込まれずに、冷静にこの問いへと「一歩一歩、徒歩で」近づいてゆく道を、現象学は指し示しているように思われるのである。(高額紙幣ではなく小銭で払え、というのが、フッサールが常々語っていた現象学のcであった)。

「自明性」へと問いを差し向けることは、結局のところ、われわれの経験と生がどのように成り立ち、営まれているのかを問うことにはかならない。

「現象学」と呼ばれる哲学的な試みは、長くそのような問いに携わってきた。それは幾つかの「ブーム」と凋落を経験し、多くの批判にも晒されたが、それにもかかわらず、いまだにそれに関心をもち、そこに可能性を見出す人々を惹きつけ続けている。哲学や思想を流行でしか見ない人にとっては、「現象学」など過去のものにすぎないかもしれないが、それは依然として世界の各所で議論され、共同的な思考のネットワークを生み出し続けている。たとえば認知科学、神経科学、ロボット工学などの分野で、現象学は新たに注目を集めているし、「心の哲学」において展開されてきたさまざまな議論と、現象学における議論との類似性や関連が関心と呼ぶようになってきている。また、看護や介護など、「ケア」という言葉で包括されるような人間への関わりを考えるために、現象学を援用しようとする動きもある。これらの動きの背景にあるのは、何らかの「確実性の地盤」、自明と見なされる基礎的前提に立脚して、「確実な」客観的成果を積み上げようというタイプの研究ではもはや対応できないような問題に、諸科学や社会的活動の各所で人間がぶつかろうになつてきたということがあるのではないか。

田口茂、現象学という思考 (自明なもの)の知へ、筑摩書房

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

(1) 意図	① 使途	② 企図	③ 徒然	④ 都会
(2) 様タイ	① 絶対	② 肢体	③ 泰然	④ 態度
(3) イ伝	① 意思	② 医師	③ 遺書	④ 維新
(4) セイ御	① 整列	② 政治	③ 請求	④ 制令
(5) 純スイ	① 睡運	② 未遂	③ 推奨	④ 無粹

問二 傍線部A「これはとても興味深いことである」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① ボルヘスという作家が、架空の物語をあえて真実だと主張し小説を刊行し続けたことで、人々が彼の作品に対して興味を持ち、世界的な作家として大成するに至る結果になったこと。
- ② われわれ自身がよく知っている日常の真理は、確実であることを疑わしいもの、胡散臭いものとして潜在的にとらえるため、われわれの知覚では真実にたどり着くことができないこと。
- ③ 「確実に金儲けができます!」「絶対確実に幸せになれます!」といった言葉は相手をだますための常套句であり、これらの言葉に従って、金持ちになったり、幸せになったりした人はいないこと。
- ④ あることが確実な真実であると主張されればされるほど、それを受け取る人々は、その主張が疑わしいもの、胡散臭いものとして、逆の意味に受け止める傾向が私たちにはあること。

5

問三 傍線部B「何の疑いもなく「確かだ」と思っていることは、それが「確かだ」ということすら通常は意識されていない」の事例として不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① われわれの自治体の祭りは二〇〇年続けて開催されており、今年も八月に例年通り開催される予定だ。
- ② 月曜日の次には火曜日、火曜日の次には水曜日、一月の次には二月、二月の次には三月が来ることになっている。
- ③ この演劇の座席はランダムで選択されることになっており、抽選に外れて観劇できない場合もある。
- ④ 地球が太陽の周りを回っているように、水星や火星などの他の惑星も太陽の周りを回っている。

問四 傍線部C「自明性」の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① それを特に意識することによって、とりわけ自分でも自然にそれをわかっているような状態。
- ② それを意識することによって、特に自分が自然にそれをわかっていることを理解するような状態。
- ③ それを特に意識することはないが、それでも自然にそれを自分で行っているような状態。
- ④ それを意識することはないが、自分がそれについて特にわかっていなくてもよいような状態。

問五 傍線部D「科学的知見は、何らかの程度において、これまで知られていなかった新しい内容を含んでいる」の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① あたりまえのことを既成事実として考えることによって、人間の能力をこれまででない未知の段階へと高めていくことが科学の役割であること。
- ② あたりまえのことを実験によって発見することによって、人々には未知とされている事柄を次第に減少させていくことが科学の役割であること。
- ③ あたりまえのことを無かったこととして否定した上で、新たな実験によって新発見したような驚きを人々に与えることが科学の役割であること。
- ④ あたりまえのことを既成事実と前提にした上で、人々には知られていないそこに潜んでいる事柄を明らかにすることが科学の役割であること。

6

問六 傍線部E「結局自分で答えを見つけ出すしかない」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 大人が感じる重さと子供が感じる重さの間にはかなりの差が存在しており、大人の言葉による説明では、子供は子供としての正しい重さの感覚をつかむことができず、自分なりに調整して大人にとつての重さの基準を判断するしかないということ。
- ② 大人がリンゴの重さについて子供に説明しても、その重さは子供にとっては大人と同じ感覚の重さとはならないため、子供は自分が納得いくまでリンゴを手を持って、自分に適した重さの感覚を学ぶ必要があるということ。
- ③ 子供が石の種類による重さの違いについての感覚を得ようとする時、大人からいろいろな説明を受けても、実際に子供が石に触って、それなりの経験を積み必要があり、この過程は他の人間には頼ることができないということ。
- ④ 重力や重さについて、子供にとつて重さという感覚があまりにも漠然としすぎていて、その感覚を正しく理解することができないため、結局、自分なりに納得する方法でしか子供はその感覚を体得することはできないということ。

問七 傍線部F「曲者」の意味について最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 悪者によって意図的に間違いが仕組まれていること。
- ② その裏に何かが隠れていそうで油断ができないこと。
- ③ 結論が出るまでに時間がかかることが見込まれること。
- ④ 内容が頻繁に変わって判断を下すことができないこと。

問八 傍線部G「そのような問い」の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 科学的な正確さは、人間をはじめとした生物や世界、宇宙の謎をこごとく解き明かしてきたが、この世に存在するすべての生物が死からは逃れられていないという問い。
- ② 科学的な正確さによっては解答することのできない、科学的な正確さがなげわれわれをアプリアリに安心させる「確かさ」として働くことができるのかという問い。
- ③ 宗教的な正確さを排除する理由にはならず、科学を妄信することが社会の秩序を乱すことにならないかという、科学的な正確さが証明されたとしても残る問い。
- ④ 科学的な正確さは、専門家でなければ理解することができないものであって、それ以外の人々が主張する「確かさ」においても、それなりの配慮を払う必要があるのではないかという問い。

7

問九 空欄 a / c にあてはまる言葉として最も適切なものをそれぞれ①～④から選び、番号をマークしなさい。

空欄 a	①	バセティック	②	アイロニック	③	ヒロイック	④	ポエティック
空欄 b	①	仰々しく	②	華々しく	③	由々しく	④	荒々しく
空欄 c	①	スローガン	②	サボタージュ	③	メランコリー	④	カストロフ

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 空の色をわれわれが「青色」であると確信しているのは、科学的な知識によってその色を青と認識するように仕向けられているからであって、別の科学的な知識によってその色が赤だと証明されれば、われわれは空の色についての認識を更新する性格を持った生き物なのである。
- ロ フッサルにとっての現象学とは、「あたりまえのこと」をあたりまえと前提した上で、「あたりまえでないこと」や驚くような新奇な知見を求めるものではない点においては、常に「確かさ」を求める科学とは異なる性質を持ったものだといえることができる。
- ハ 「重力」によって「重さ」を説明しようとしても、羽も石も等しく重さを持っていることが、日常生活においてはより基本的に「あたりまえ」の次元に属しているために、「羽の軽さ」に対する「石の重さ」の違いについて人々を納得させるような解答を準備することは難しい。
- ニ フッサルによって創始された現象学は、長年にわたって人間的経験や人間の生をある程度の包括的な見通しをもって論じるプラットフォームを人々に提供してきたが、関係する研究者の意見の相違がこの学問の継続を極めて困難なものにしつつあると言われている。

8

確かにこの説明はわかりやすい。しかし、これではあまりにも単純すぎるのではなからうか。たとえある人が特定の人にねたみを感じていたり、その人の死によって金銭的な利益が得られるとしても、殺人事件にまで発展することは稀であろう。動機があっても必ず行為が起こるとは限らないのだ。また、特定の動機がどのような行為を生じさせるかについても予測できない。相手を刺殺するか、毒殺するかという行為の違いは、嫉妬という動機だけではわからないのである。

今、あなたがしている「読書」を例に考えてみよう。あなたは本を手にとって読む気になり、実際に読み進めている。これこそがモチベーションと呼ばれる心理現象の具体例である。そこでは、本を開く、ページをめくるといった行動(身体的な動き)と同時に、読解(文章の意味を理解する)という身体内(頭や心)での「動き」が進行している。しかも、その一連の行動(読書)という行為)はいずれ終わるはずだ。

心理学の一般的な定義によれば、モチベーションとは「特定の行為が発発し、持続し、方向づけられ、最終するというプロセス」とされる。読書の例でいえば、あなたが本を読みはじめる。ゆっくり丁寧に読む、あるいは読み飛ばすなど、自分なりの読み方で読み進めていく。そして、終わるまで読み終えるか、途中で読むのをやめる。このひと続きの現象が読書のモチベーションなのである。

モチベーション研究では、行為(一連の行動)のプロセスに対応して、以下の3つの問いが主に検討されてきた。

まず「その行為が起こるのはなぜか」というテーマ(行為発発の問い)である。通常、その答えとして「理由」が挙げられることが多い。これは、日常語としての動機にはば該当する。

たとえば、あなたはなぜ本を手にとって読みはじめたのだろうか。人によってその理由は様々だろう。仕事で報告書の提出が求められており、参考書として本を手にとったという人もいるだろう。友人に勧められたので、次に会ったときの話題にしようと思つて読みはじめた人もいるかもしれない。このように同じ行為であっても、行為発発の理由は様々である。

ただ、このような理由が行為の本当の原因だと断定はできない。たとえば「仕事のため」という理由の背後に、「上司にはめられたいから」といった半ば無意識な原因が潜んでいる場合がある。当人が答える理由は意識にのぼった説明(しばしば解釈)にすぎず、必ずしもその理由に即して行動が生じているとは限らないのである。

以上のことから、モチベーションの心理学では理由の認識だけではなく、非意識過程も含め、より広範な行為の原因について検討している。

では、その読書活動ほどの程度続くだろうか。最後まで一気に読了する人もいるかもしれないが、「目が疲れてきた」、「飽きてきた」、「しなればならない別の予定がある」といった理由によって読書を中断する場合も多いだろう。このように「なぜその行為が続くのか/続かないのか」(行為持続の問い)がモチベーション研究の第二の問いである。持続しないということは当該行為の終了を意味することから、それは「なぜその行為が終わるのか」(行為終結の問い)をも含んでいる。

一般に、ひとつの行為に取り組んでいる時間が長ければ長いほどやる気があり、すぐにやめてしまう場合、やる気がないと思われがちである。ただ、ここの重要な論点は、なぜその行為が持続するのか、なぜその行為が終わってしまうのかである。読書に没頭して時を忘れて読み進める人がいる一方、記述が難解で読むのが嫌になって途中で放棄してしまう人もいるかもしれない。内容がつまらないと感じていても、期限までに報告書を書くために何とか⁽⁵⁾シン抱して読了する人もいるだろう。このように行為が持続したり、終わったりする理由も様々であり、その点を探ることでモチベーションの実相に迫ることができるのである。

第三の問いは、「その行為がどのようにコントロールされ、変化したり、進展したりしていくか」(方向づけの問い)である。

たとえば、読書の始発や持続の理由によって「読み方」は違ってくる。自らの興味や関心から読書をする場合、自ずと熱心に読み進めていくだろう。同じ箇所を読み返したり、部分的にゆっくり目を通すなど、文章の意味をじっくりと理解しようとするに違いない。

一方、仕事の一環として報告書の作成のために読む場合、メモを取ったり、マーカーで線を引いたりしながら読み進めるかもしれない。説明が求められた場合に備えてわからない語句を事典で調べることもあるだろう。同じように仕事为目的であっても、人によっては報告書に使えるような部分だけさらっと斜め読みをするだけの不熱心な人もいるに違いない。友人に勧められ、話題作りのために読んでいる場合には、その友人の関心事や話が盛り上がりそうな内容を予想して、関連する箇所だけピックアップし、他を読み飛ばすかもしれない。

以上のように、モチベーションのプロセスにおいては、読み方を柔軟に変えるなど、行為が調整されたり、メモする、線を引く、事典を参照するなど、発展的な行為が新たに生じたりする。モチベーション研究では、このような現在進行形の行為の展開にも着目する。

なお、モチベーションというと、活動的なイメージがあるが、われわれの行為は心身が一体化した活動であり、外面的にみてもとれる行動のみならず、そこには読解といった認知プロセスや、「ワクワクする」「退屈だ」といった情動プロセスなど、身体内の活動もその対象に含まれているという点に留意したい。身振り手振りが決して派手ではなく、身体はほとんど動くことはなくても、熱心に気持ちを集中させて読書をしている姿にわれわれは意欲を感じるに違いない。モチベーションを検討する上では、内面的行為にも着目すべきなのである。

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

(1) フ及	① 負債	② 普請	③ 還付	④ 分布
(2) ケン著	① 検定	② 喧伝	③ 文献	④ 露頭
(3) イ業	① 変異	② 偉人	③ 威圧	④ 遺跡
(4) 豪カ	① 華道	② 寡黙	③ 佳人	④ 過剰
(5) シン抱	① 慎重	② 水深	③ 辛酸	④ 真理

問二 傍線部A「達成」というキーワードを媒介として利害が一致した」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① モチベーション研究の二大領域である「教育」と「経営」において、前者では教育心理学における「勉強させる」こと、後者では産業・組織心理学における「働かせる」こと、を研究する上で、それぞれの「達成」を判定の基準とすることが非常に有効であった、ということ。
- ② 社会においては「達成」、すなわち「業績」や「成果」そして「それを生み出す行為」(パフォーマンス)が極めて重要であるから、働く側と働かせる側の双方において、「達成」というキーワードを自覚することが両者にとってウィンウィンの関係となる、ということ。
- ③ 人をコントロールすることへの関心およびニーズからモチベーションの研究が盛んになったが、経済、教育、犯罪、広告といった異なる分野におけるモチベーションの研究は「達成」という観点を得てようやく学問的な探求が可能となった、ということ。
- ④ モチベーションの研究は意味のある動きやその結果の指標としての「達成」を説明する学問分野へと発展したが、これは個人に対して有効性や有用性などの「達成」を強く求める社会の側と、双方にとって好都合なことであった、ということ。

問三 傍線部B「達成(パフォーマンス)＝能力×モチベーション」の内容を説明したものとして**不適切なもの**を次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① この公式は、「達成(パフォーマンス)」が「能力」と「モチベーション」の積であることを示している。
- ② この公式から、能力が高いほど、あるいはモチベーションが高いほど、「達成(パフォーマンス)」も大きくなるといえる。
- ③ この公式では、「達成(パフォーマンス)」を「能力」と「モチベーション」の要素に捨象している点が最大の課題といえる。
- ④ この公式が「価値ある関式」として確立したのは、「モチベーションが達成を左右する」という発想を含蓄しているからである。

問四 傍線部C「ここで発想を転換してみよう」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「達成」を「能力」と「モチベーション」の積という「公式」で示したが、この「公式」を展開させて、「モチベーション」を求める公式に立て直すと、全く異なる視点から「モチベーション」が定義できる、ということ。
- ② モチベーションが「達成」を左右するという発想から、「達成」を生活に埋め込まれた日常的な活動であると理解し、これらの活動を「達成に向けたモチベーション」という発想に転換してみよう、ということ。
- ③ 「達成」には様々なレベルや種類があり、それらの「達成」は先の「公式」によって「能力」と「モチベーション」の積で求められるが、この「モチベーション」と「達成」とを逆転させてとらえよう、ということ。
- ④ 「達成」という特別な成功をイメージしてしまいがちであるが、「達成」とは見なされない多くの日常的行為を「達成体験」とすることで、「達成」の多様性を認めてみよう、ということ。

問五 傍線部D「この達成を支える心理的な要因が、まさにやる気や意欲なのである」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「やる気」や「意欲」は、たとえば教育分野では「学習意欲」ということになり、「学習意欲」が「達成」によって支えられることは容易に理解できるが、実はその「達成」のためには「学習意欲」と「能力」との相関性が重要である、ということ。
- ② 「やる気」は、「達成」を表現する例の「公式」では「モチベーション」という項目に相当するが、どの程度をもって「達成」とするのか、という判断については、「当人にとっての価値」を「達成」の心理的要因とする理解が不可欠である、ということ。
- ③ 他者や社会が求める業績や成果ばかりではなく、当人にとって価値のある行為によって得られた「達成」が心理的な喜びや充実感をもたらし、その「達成」を支える要因ともなる「モチベーション」を構成しているという構造になっている、ということ。
- ④ 「達成感」は「生きる意味」と関連しているため、日常における「達成」はわれわれの日常生活に喜びや充実感をもたらし、心身の健康をも促すことになるが、その「生きる意味」の探求こそが全ての行動につながる「モチベーション」の正体である、ということ。

問六 傍線部E「これではあまりにも単純すぎるのではなからうか」の理由を説明したのとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 殺人ミステリーなどでは犯行の「動機」が必ず問題になるが、犯行と「動機」を結びつけたミステリーでは娯楽性が損なわれるから。
- ② われわれは日常生活での全ての「モチベーション」を「動機」によって説明しているが、それでは各人の個別の事情しか理解できないから。
- ③ 「モチベーション」を「動機」によって説明するが、「動機」が行為の必然とは限らず、特定の「動機」がもたらす行動も予測できないから。
- ④ 「モチベーション」を理解するためにすでに「達成」という視点の有効性が認められており、改めて「動機」という変数の導入は不要だから。

問七 傍線部F「ひと続きの現象」の内容を説明したのとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 特定の行為について、始発・持続・方向づけ・終結という一続きの現象におけるモチベーションとらえる、ということ。
- ② どのような行動であれ、必ず「モチベーション」と連動することになるが、「読書」などはその好例である、ということ。
- ③ 「読書」における「モチベーション」とは、本を手に取り、実際に読み始めるまでの一連の行動のことをいう、ということ。
- ④ 「読書」では、ページをめくるといふ身体的な動きと同時に読解するといふ身体的な動きが一続きの現象となる、ということ。

問八 傍線部G「モチベーション研究の第二の問い」の内容の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「モチベーション」研究において、「行為」を起こすことになるその「始発」に対する問いは、その行為の「理由」を説明することになるが、その「理由」とは日常語としての「動機」とほぼ同義と見なすことができるのではないかと問い、ということ。
- ② 読書という行動の「理由」を例に挙げても、その「理由」は様々であって、行為の本当の原因としての「理由」を特定することは困難であるため、心理学の分野で行われる、無意識の過程を含む広範な原因の分析と考察を行うための問い、ということ。
- ③ 一連の行動も、様々な理由によって人ごとにその持続の形態に違いが発生するが、その持続の形態について、当人が自覚している「理由」のみならず、外的な要因についても同様に「行動」に違いを生じさせるか否かを問い直す、ということ。
- ④ 「モチベーション」のプロセスの一つである「持続」に対する「行為持続」の問いであり、「なぜその行為が続くのか/続かないのか」という問いであるため、当該行為の終了に関する「行為終結」も含まれる問い、ということ。

問九 傍線部H「モチベーションを検討する上では、内面的行為にも着目すべきなのである」の理由を説明したのとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① ひとつの行為であっても、その行為のありようは様々に異なる姿で発現し、それは「現在進行形の行為」として理解されるが、その「現在」の行為に密接に関わるのが当事者の内面であるので、「現在進行形の行為」は当事者の内面的行為であるとみなすべきであるから。
- ② ひとつの「モチベーション」によって行為が誘発されるが、その行為は「モチベーション」のプロセスによって行為が調整されることで、さまざまな発展的な行為を生じることがあるので、これらの展開の根拠となる「動機」に常に注意を払う必要があるから。
- ③ 「モチベーション」というと、活動的なイメージと相まって外面的に見てとれる行動に注目しがちであるが、その行動は心身が一体化した活動であるので、認知プロセスや情動プロセスといった「内面的行為」もまた注目しなければならないから。
- ④ たとえば「読書」では外面的には派手な行為として現れることはなく、むしろ読解という行為に集中しており、そこに意欲を理解するのが一般的であるように、あらゆる行為を内面的行為としてとらえ直す必要があるから。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 社会は個人に対して「達成」を強く求めるため、「達成」を確実にするために「モチベーション」研究が悪用されることがあった。
- ロ 人をコントロールすることに対する関心やニーズによって、「モチベーション」研究の隆盛は支えられてきた。
- ハ 「モチベーション」は「動機」によって説明され、理解されるのが一般的であるが、それは「動機」こそが当該人物の特定の理由が特定の行為を生じさせる原因であるという理解によっている。
- ニ 「モチベーション」の実相に迫る上で、一つの行為に取り組んでいる状況に対して、その行為がどのように持続したり、終わったりするのか、その理由を探るといふ方法では困難があるといえる。